

## 5周年記念に寄せて

発達クリニックぱすてる 院長 東條恵 2020年6月8日

2016年5月2日に開業し、4年が経ち、2020年5月2日で、5年目に入りました。

5周年記念として、思いを述べてみようと思いました。

- 1) **来られるゲストの方々の事:** 大体年間1000人弱の新たなゲストの方々が来られ、この4年間で4000人弱の方に、当クリニックをご利用頂きました。年齢は学齢前と小学生が多く、次に中学、高校、青年期、大人の順に少なくなっていくという印象です。最高齢は65歳の方でした。以前の職場である新潟県はまぐみ小児療育センターと比べますと、年齢の高い方が増えています。大人のADHDの方も増えてきています。ADHDの親子治療も増えています。医学モデルだけではなく、愛着モデル、ストレスモデルで考える必要のある方がかなりの部分を占めています。来て頂き、やり取りをする中で、その子を取り巻く環境の大きな部分である、家庭内のとりわけ父母の養育態度内容の変更を通し、お子さんが良い方向へかわる多くのケースに出会うことは、愛着の問題の大きさを考えさせます。医療モデルで考えての薬物治療のみではなく、愛着モデルで問題を考え支援を組み立てようとする必要があるようになってきました。これらの支援を考え実行する中で、お子様と家庭の状態が好転することは、支援者側の自信につながり、嬉しいとともに、スタッフ側に取り学びの多いことになっています。勿論全ての人で上手く改善しているわけではないのですが、私たちが目指す方向が大方間違っていないと思えることは有りがたいことです。

なおゲストと呼称することにも、私たち自身慣れました。患者という響きが私はなじまないと感じてきた中で、言葉を変更してみたのです。医療という場が、医療スタッフとゲスト側の関係がより平らになるために、私たちはホテルマンのような対応ができればと思ってきたのです。外からみれば、その様に見えない現場もきっとまだ多くあるでしょう。それは私たちの振る舞いが、まだ上手く出来ていないことを意味するのでしょう。精進するしかありません。見守って頂き、ご意見頂ければ幸いです。

- 2) **医師だけでは、児童精神科領域の支援はできないと、この間学んでいます。** 幼児期から学童期では、言語聴覚士、作業療法士からの個別支援、グループ支援は欠かせないものと考えています。日々の具体的な支援内容を考え、お子さんや養育者に具体的支援の工夫を伝える重要な役目を、1対1で相談にのる療法士が主に担っています。また臨床心理士からの支援は、悩める親御さん、そしてご本人に取り大切な内容と思っています。人は、1対1の人との関係性の中で自分を形成するし、そのためには自分と相対する具体的な人からの助け、特定の人といった存在が必要で、その方からの意見は受け入れると信じています。親子関係がねじれ、人への思いが削れている人には、人が安心出来る対象であることを再度思い起こして貰う

ことも、臨床心理士の役目と思っています。そして親子関係の修復を目指す愛着支援も、医師や療法士もですが、臨床心理士の仕事の大きな部分となっています。また特に自閉スペクトラム症の方において、自己理解を進めて貰うためのスタッフからの支援も、臨床心理士の仕事として大きい部分を占めていると思っています。

- 3) **当クリニックでは、新しいゲストの方々には、医師だけでなく、看護師からの寄り添い、理解の手助けといった支援を行っています。**特に新ゲストの初診の後には、かなりの時間を割いて看護師よりの支援をしていこうと努めています。医師へ聞きにくい事、医師の説明で理解できなかったこと、これらを聞き出し疑問に答えることは、看護師の仕事としています。その場面が一番大切な看護の時間のひとつと思っています。困り感があってこられた方々への、不安解消、疑問解消、ここが安心できる場所であると思って頂くことが必要と思うからです。このような対応を、新ゲストとして来られ医師と看護師の対応を経験されたゲストの方々がどのように感じたかは、私たちに取って大事なことで考えています。感想や意見などを、アンケート、FAX、お手紙などでお教えいただくと、院長である私を含め、スタッフは励まされかつ反省させられることになると思っています。例え、批判的な内容であっても、一時的に辛さなどを感じたとしても、トータルとしては嬉しい話と思っています。クリニックの改善のためには、宜しくご意見の程お願いします。建設的な提案・批判は大歓迎です。
- 4) **4年間の中で、新たに父母へ伝えることが心の中で積み重なり、2019年の12月にささやかな書籍づくりにつながりました。題名は「発達凸凹の子をどう育てるか？」**です。イラストは自分で描きました。以前の出版書籍では、我が子にお願いして描いて貰っていたりしたのですが、それぞれ仕事で忙しくなり、自分でするしかないと思ったのでした。挿絵の書き方の書籍を購入し、挿絵の練習を若干行い、描いてみました。「下手だなあ」と自分で思うのですが、これもありかなと居直っています。
- 5) **そして次なる本を、若干苦しみながら2020年5月、つまりつい先日に出版しました。「脳システム論で発達凸凹・はったつ障がい・人の理解そして個別支援計画づくりへ」という題名です。**この間10年近くに渡り勉強会をしてきた、私にとって大事なテーマ「脳システム論」をまとめた内容、「支援の為の考え方と具体的支援の内容」についての本です。私としては、「自分の行ってきた仕事内容の集大成」とも言える書籍です。医学モデル、愛着モデル、ストレスモデル、社会的人間関係モデルを融合した分析と支援の視点を述べ、実践的な内容にしています。本書のような視点は重要であり、全体を俯瞰した分析と支援を考える必要があると思っています。そして「脳システム論」を使うことで、個別支援はより良い内容になると確信します。是非、多くの方に知って貰い、ご検討して頂き、そして採用して頂きたいと考えます。
- 6) **まだまだ、仕事としてしたい事・行いたい分野は多々あります。**年齢がもっと若ければ・・・と感じるこの頃です。「新潟市の西にもう1か所、このようなクリニックがあればなあ」とか、「重症児を含むグループホーム」などの展開に関与してみたいとか、支援システムとしてのコンタクトパーソン制度(困っている人はサポーターを持つ権利を有すると思えます)の創設をモデル的に進めてみたいとか、いろいろです。できることを検討し定め、前向きに進んでいきたいもので

す。

- 7) **当クリニックの5周年は、コロナ禍の真ただ中です。**パンデミックは100年に一度の出来事であり、これまで同世代に生きている人々の誰もが経験していない事態を経験させられているわけですが。全ての人が全てを見通せない・理解できない中で、手探りで方向性を出さざるを得ない私たちの姿は、いろいろと考えさせるものでした。また自分の行動をどうすべきかを定める上での、外からの情報で何が本当かを考えさせる経過でした。「分からないことはわからないとしよう。わかったふりはしないようにしよう」と思いました。分からないのに、分かっている風をよそおいつつ、人々に影響を与える方向を出す事の恐ろしさも感じます。ファクトフルネスという言葉は、一つの大事な視点でしょう。

一方で、また自分の中に一本の芯、動き方の芯棒を作ることができないもどかしさを感じたことが多くありました。安定した日々では考えもしなかったことを考えさせられたわけです。未知なる事態に接し、人は強くはなく弱いものであり、頼れるものがない中で、それらしいものが出ると飛びつく様は、死を怖れる個人、連帯を唱えつつ連帯を仕切れない個人という生命体の限界のようにも思えます。それは他者と皮膚で分断されている個人の宿命なのでしょう。そんなことを感じました。

ソーシャルディスタンスといわれると、なるほどそうだと思います、その後フィジカルディスタンスという言葉に訂正され、なるほどそうだった自分がいます。ソーシャルディスタンスという言葉が最初に聞いたときの響きの良さや違和感はこれだったのかという思いと、それを最初に見抜けない自分のいい加減さを感じ、人に影響されやすい自分を情けなく思ったのでした。社会的分断が為されているコロナ禍の中で、何でソーシャルディスタンスという言葉が素直に受け入れたのだろうか？ 自分の考えがないからではないか、というわけです。

**そんなこんなで、5年目に入ります。** ともかくも皆さん、当クリニックを上手く利用して頂ければ幸いです。私たちは、上手く対応できない場合もあるかと思いますが、反省しつつ、より良い対応に努めたいと思っています。 よろしく、お願い申し上げます。

発達クリニックぱすてる 院長 東條恵